

With/Post コロナで求められる

中国語教育とは

紅粉芳恵・山本晃輔

一 はじめに

Covid-19 が発生して三年が経過したが、この間のことを振り返ってみると、まったく経験したことがない事態の中で、やるべきことをいかにこなしていくかということを考えながら走ってきたように思う。二〇一九年一二月初旬に一週間の上海・長沙出張。年が明けて一月六日に厚生労働省から中国武漢で原因不明の肺炎が発生との注意喚起があり、上海に留学中の学生を一斉帰国させる準備にはいり、一月三〇日に全員帰国完了。新学期からのオンライン授業に備えて、幹事をしている中国語教授法研究会（S T M C）の例会で、三月二二日に Zoom の使い方を講座を開

催。四月二五日に中国語教育学会の緊急企画「中国語の遠隔授業をデザインする」で『Zoom 基礎の基礎』と題して発表。オンライン授業に備えて、一五本の発音動画を作成し、本務校の非常勤講師や友人教員にシェアするなどを行った。

専任教員は大学の決定を非常勤講師に伝え、オンライン授業のサポートをしなければならず、非常勤講師は大学によって異なる授業形態や LMS の使い方を早急に習得しなければならず、誰にとっても大変な二〇二〇年度の授業開始であった。そして、それぞれの現場での試行錯誤の二年間が過ぎ、二〇二二年度は多くの大学で対面授業に戻った。大学で中国語を教える教員がこの間、それぞれの現場でどのように感じながら授業をし、With/Post コロナの中国

語教育をどのように考えているのかを、一旦この時点でまとめておくことは意味があるのではないかと考え、アンケート調査を実施した。

二 アンケートの内容と分析

今回のアンケートは、大学で中国語を教えている教員を対象とした。筆者が幹事を務めている中国語教授法研究会のメンバーリスト登録者（登録者数一三四人）を主たる対象として、Google フォームで作成したアンケートを配布、五四人から回答を得た。この場を借りて、アンケートにご協力いただいた方々にお礼を申し上げたい。

なお、本研究は大阪産業大学研究倫理審査委員会より承認を受け、実施された（二〇二二年倫一〇五）。

以下、項目ごとに分析を行っていく。

- (一) アンケート回答者のバックグラウンドについて
 - (1) 回答者五四人の内訳は、男性一五人、女性三八人、回答しないが一人
 - (2) 回答者五四人の平均年齢は四七歳
 - (3) 回答者五四人のうち、日本人が三七人、中国語母語話者が一七人
 - (4) 中国語母語話者一七人の来日平均年数は一九年

(5) 回答者五四人の中国語教授歴は平均一八年

(6) 回答者五四人の職位は、教授九人、准教授一五人、講師六人、助教一人、非常勤二三人

回答者の専攻は、日本人は中国文学・中国語学専攻者が多く、中国語母語話者の専攻は、日本語学が多数であったが、対外漢語・経済学・財務会計・英語教育専攻者もいた。回答者が取得している各種資格を図1に示す。

回答者が所属している学会・研究会について図2に示す。中国語教育学会は三四人、中国語学会は三三人、中国語教授法研究会は一八人、日本中国學會は一三人となっている。

回答者の学会・研究会・ワークショップへの年間参加回数について図3に示す。年に一〜二回参加が三七％と最も多く、次に五回以上参加が三一・五％となっている。

学会・研究会・ワークショップ以外で、中国語教育関連情報を収集しているSNSについて調べた結果が図4である。一番多かったのはWeChar（二二人、四〇・七％）であったが、SNSからは情報を収集していない教員も一九人（三五・二％）いた。学会・研究会・ワークショップへの年間参加回数が〇回、かつSNSからも情報を収集していない教員が二人いた。

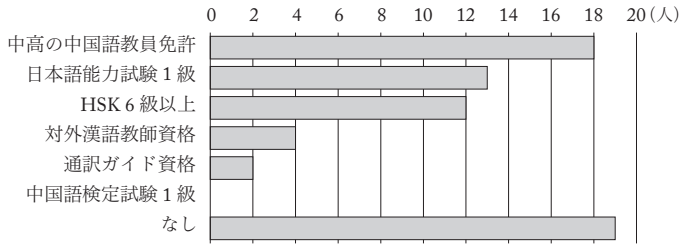


図1 取得している資格（複数回答）

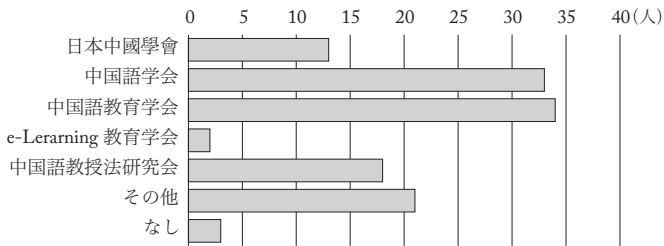


図2 所属している学会・研究会（複数回答）

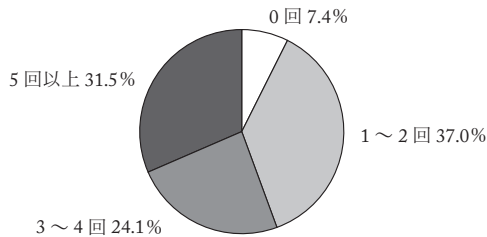


図3 学会・研究会・ワークショップへの年間参加回数

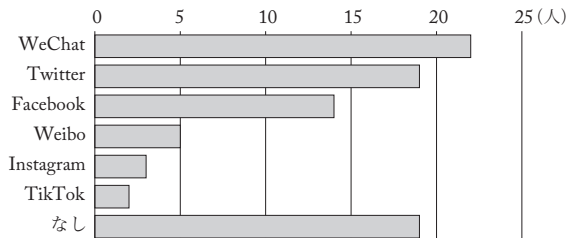


図4 中国語教育関連情報を収集しているSNS（複数回答）

(二) 授業デザインに関する設問

図5は、授業において、課題のモールステップ、バックワードデザイン（逆向き設計の授業）、反転授業、成績評価にループリクを使用しているかを、(1)全く使用していない、(2)あまり使用していない、(3)やや使用している、(4)いつも使用している、の四項目から選択した結果である。課題のモールステップは、(3)やや使用していると(4)いつも使用しているを合計すると約六五%が使用しているが、それ以外の三つの授業方法は七割が使用しておらず、教え方の引き出しが少ないことがわかる。

しかし、図6からわかるように、授業を改善するための知識を得ていないわけではなく、講義、講演会、ワークショップなどに参加しているが、それを授業に活かすまでには消化できていないのではないかとということが予想される。

(三) コロナ禍の授業に関する設問

二〇二二年度の授業は、回答者の八五・二%が対面授業を行っている。コロナ禍の授業をどのように感じたかという設問に対しては、非常に困難だったのが五・六%、やや困難だったが二七・八%、困難ではなかったが一八・五%、まったく困難ではなかったが一・一%、どちらともいえ

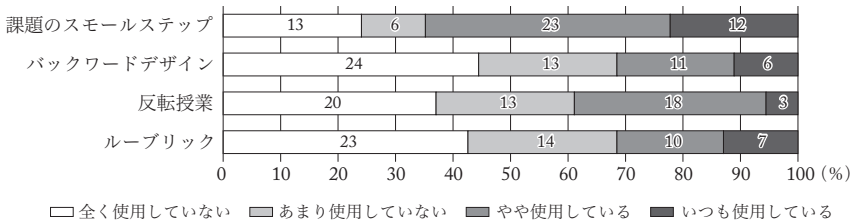


図5 使用している授業デザイン

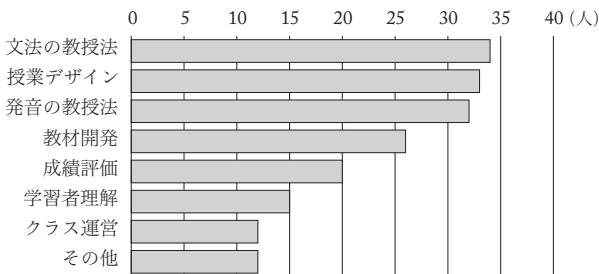


図6 講義などに参加したことがある授業運営のテーマ（複数回答）

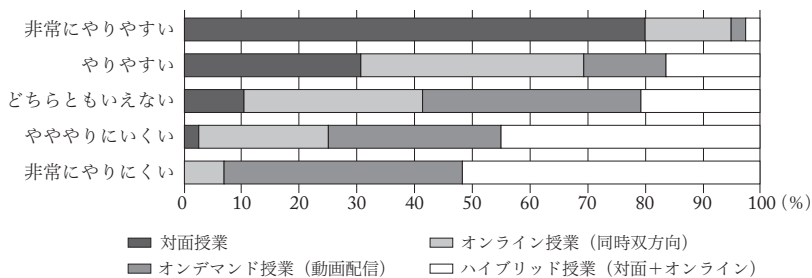


図7 各授業形態の実施難易度

ないが三七・〇%であった。約七割の回答者がこの非常事態に適切して授業を行っていたことがわかる。

コロナ禍で行われている対面授業、オンライン授業(同時双方向)、オンデマンド授業(動画配信)、ハイブリッド授業(対面+オンライン)の各種授業形態の実施難易度を、(1)非常にやりやすい、(2)やりやすい、(3)どちらともいえない、(4)やややりにくい、(5)非常にやりにくい、の五項目から選択した結果を図7に示す。予想通り、対面授業のやりやすさとハイブリッド授業のやりにくさが突出している。専任教員であれば、研究費でハ

イブリッド授業用の器材を購入することは可能であるが、非常勤の場合は大学側がどれだけ設備を用意しているかによって授業のやりやすさに影響を与えていることがうかがえる。

さらに、コロナの前後で授業方法がどのように変化したかを調べるために、コロナ前、コロナ後のそれぞれの授業方法についての使用度(1)まったく使用しなかった、(2)あまり使用しなかった、(3)やや使用した、(4)いつも使用していた)を評価させ、その平均値に差がみられるかどうかについて対応のあるt検定を行った。その結果を表1に示す。以下、有意差が出たものについて考察をしていく。表1によれば、コロナ前の方がコロナ後よりも「板書」の利用が有意に多いことがわかった。これは当然予想される結果で、対面授業でなくなったために、トレードオフの関係で、「PowerPoint」や「自作の補助教材動画」の使用が多くなったといえるだろう。

「本文の斉読・暗唱」はコロナ前がコロナ後よりもその使用が有意に多かった。オンデマンド授業ではこれらの授業方法は実施できず、またオンライン授業でもマイクをオンにすれば学生の音声为重なり、ミュートであれば音声が聞こえないので、どちらも学習効果を得られないからだと考察される。「ペアワーク」もコロナ前がコロナ後よりもその使用が有意に多かった。対面授業であれば教員が教室

表1 コロナ前後の授業方法の変化に関する
 評定平均値およびt検定結果

授業方法	コロナ前	コロナ後	t (53)
板書	3.54	3.07	3.60*
PowerPoint	2.74	3.43	5.10*
テレビやYouTubeなどの動画	2.54	2.72	0.75
自作の補助教材動画	1.87	2.39	3.94*
本文の斉読・暗唱	3.72	3.37	3.54*
単語テスト	3.41	3.19	2.06*
日文中訳	3.43	3.37	0.77
中文日訳	3.46	3.30	2.27*
作文	3.06	2.96	0.93
通訳練習	2.00	1.96	0.35
学生による動画作成課題	1.70	1.69	0.33
ペアワーク	3.15	2.76	3.43*
グループワーク	2.76	2.57	1.65

注：* $p < .05$

内の活動を見渡して、適宜アドバイスすることができたが、Zoomにはブレイクアウトルーム機能があるものの、グループ分けの操作は慣れるまでに一定の時間がかかる。加えて、クラスサイズによっては十数個のブレイクアウトルームを回るにはかなりの時間が必要であり、教員がルームにいない時間に学生がきちんとタスクをやっているかどうか不明であるためコロナ後には少なくなつたと解釈される。

また、変数間の相関関係を検討するために、ピアソンの相関分析を行った。主要な結果のみについて報告する。中国語母語話者の来日年数とスマールステップ ($r = -0.53, p < .05$)、Google フォーム ($r = -0.59, p < .05$) の使用についてそれぞれに有意な負の相関係数が確認された。来日年数が長いほど、スマールステップやGoogle フォームの使用が少ないことが示された。来日年数が長い中国人教員は新しい授業スタイルやICTの活用にやや消極的であるということがうかがえる。

(四) ICTに関する設問

中国語教員のICTレベルは高いとはいえず、トップランナーの御三家(中国語ペンイン変換ツールやOndoku Chineseなど)教員・学生にとって便利なツールを開発している目白大学の氷野善寛先生、FacebookやnoteなどにI

CT関連の記事をアップし、ICTのワークショップをこの二年間定期的に開催していた大阪公立大学の清原文代先生、最先端のVRを授業に取り入れている沖縄大学の渡邊ゆきこ先生」とそれ以外に二極化している状態である。コロナにより強制的にオンライン授業をすることになったため、中国語教員のICTレベルの底上げがある程度できたことは喜ばしいことといえるだろう。アンケートからICTを使えるかどうかは周りにサポートしてもらえ存在があるかどうかが大きな要因となっていることもわかった。

各大学ではコロナ禍でBYOD化(Bring Your Own Device) Ⅱ自分のデバイスを持ち込む)がなお一層進む傾向にある。中国語教員は授業のオリエンテーション段階で「中国語学習を助けるICTのいろは」としてパソコンやスマートフォンでの中国語入力方法、オンライン辞書の紹介、翻訳アプリの正しい使い方などを学生に最低限教えておく必要があるだろう。

二〇二〇年七月の「高等教育機関におけるICTの利活用に関する調査研究報告書(第2版)」によると、四年制大学のおよそ七割がLMSを導入しているとのことである。オンライン授業になり、LMSの利用がより進んだと思われるが、アンケート結果からも図8に示す通り、「コロナ前から利用している」と「コロナ後に利用し始めた」を合計すると九割近い教員が利用していることがわかった。

筆者が実際に使用して授業に役立つと感じた一六のアプリについての認知度(1)知らない、(2)知っているが未使用、(3)何度か使用、(4)よく使用)を調べたのが図9である。それぞれのアプリについての説明は、論文末にまとめて記しておく。

一九八七年にリリースされたPowerPointは使用者が多いが、この十数年に開発されたアプリの認知度はかなり低い。アプリを使用することで授業を活性化できたり、学生の自主学习が進んだり、自身の仕事の効率化を図ることができるといったメリットがあるので、積極的にICT関連の情報収集をすることは今後さらに必要になるだろう。

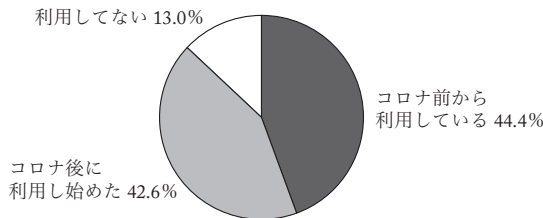


図8 LMSの利用状況

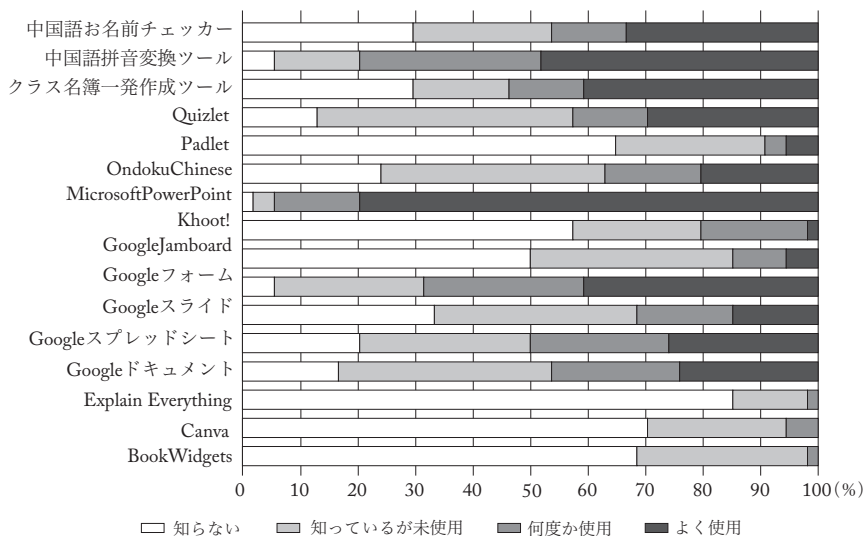


図9 授業に役立つアプリの認知度

(五) With/Post コロナの中国語教育についての設問

「あなたは With/Post コロナの中国語教育についてどのような考えていますか? コロナを経験して変化した授業内容や今後の中国語教育に求められることなどについてご記入ください」という設問をし、自由回答での記述を求めた。回収されたデータの内容を検討するために、KHCoder⁽⁴⁾を使用し、テキストマイニングを行った。なお、「中国」、「中国語」は分析対象から除外するように設定した。まず、頻出語を調べた結果、総抽出語数は三八一語、実使用数は一五六八語であった。出現回数が十回以上の頻出語は、「思う」三二回、「授業」三二回、「学生」三一回、「考える」一八回、「対面授業」一六回、「教員」一五回、「オンライン授業」一二回、「オンライン」一一回、「コロナ」一一回、「感じる」一一回、「ICT」一〇回、「対面」一〇回であった。

次に、他の変数との関係についてコレスポネンダ分析を通して検討する。第一に、専任・非専任、および学会、ワークショップへの参加頻度(以下、学会参加と示す)によって記述内容が異なるかどうかを検討するために、それぞれを外部変数として設定し、分析を行った。なお、学会参加は二回までを少群、三回以上を多群として設定した。結果を図10に示す。なお、以下同様であるが、この図にお

いて円および四角は頻出語の多さを示している。

図10から、第1軸(成分1)は専任・非専任要因であり、第2軸(成分2)は学会参加数要因であると解釈され、群ごとに特徴語が異なる可能性が示唆された。群ごとの特徴語を検出するために、外部変数と頻出語の共起の強さを表すJaccard係数を算出した。その結果を表2に示す。

図10および表2によれば、専任・非常勤に関わらず、学会参加の多寡で、オンライン授業に関する特徴語に差があった。この結果をもとに、個々の自由記述を検討すると、学会参加が多い教員はオンライン授業を積極的にとらえる記述が多く、学会参加が少ない教員はオンライン授業を消極的にとらえる記述が多かった。この時期に開催された学会やワークショップでは、オンライン授業についての情報交換が盛んに行われたため、情報を得る機会が多い。そのため、学会参加の多い教員は少ない教員と比較してオンライン授業に積極的になれたのではないかと解釈される。以下に代表的な結果を示す。

【学会参加多群】

・オンライン授業などを経験して、ICTや動画などの運用がより積極的になりました。それを今後の中国語教育に活かしたいと思います。ただ、オンライン授業ですと、ビデオをオンにしてくれない学生もいて、ペアワー

クなどやりづらい感があります。その有効的な方法を現存も今後も模索していきたいと考えています。

・遠隔授業でも、授業は実施することは可能だと確認できました。そして、通勤・通学・会議に参加するための往復に關しての負担・手間がなくても貴重な情報を手に入られることが非常に助かります。確かに遠隔授業でしたら様々な欠点(「一部のタスクが実施できません・効果が悪くなります」)があるかもしれませんが、それは今までの授業に關する原則は対面を仮定して決めたものためではないでしょうか。「遠隔授業ではこのようなタスクを設置する方が効果的だ」「対面授業ではこのようなタスクは効果的だ」のような研究があれば嬉しいです。非常に興味あります。

・アナログ人間のため、遠隔授業が始まる前はオンライン授業に対して消極的でした。しかし三年間の実施を通して、中国語教育、特に発音指導の観点から、マスクをつけての対面授業より双方向型の遠隔授業の方が効果的だと思われるようになりました。現在使用しているMicrosoft Teamsのソフトは大変便利で、資料の配布、共有、録画、録音、出席統計、課題の提出、個人面談等が簡単にできる利点を数多く有し、コロナ後も是非活用したいと考えています。ただ、これらはいくまでも教員側の感じたことです。学生側の立場に立つと、恐らく集中力の持

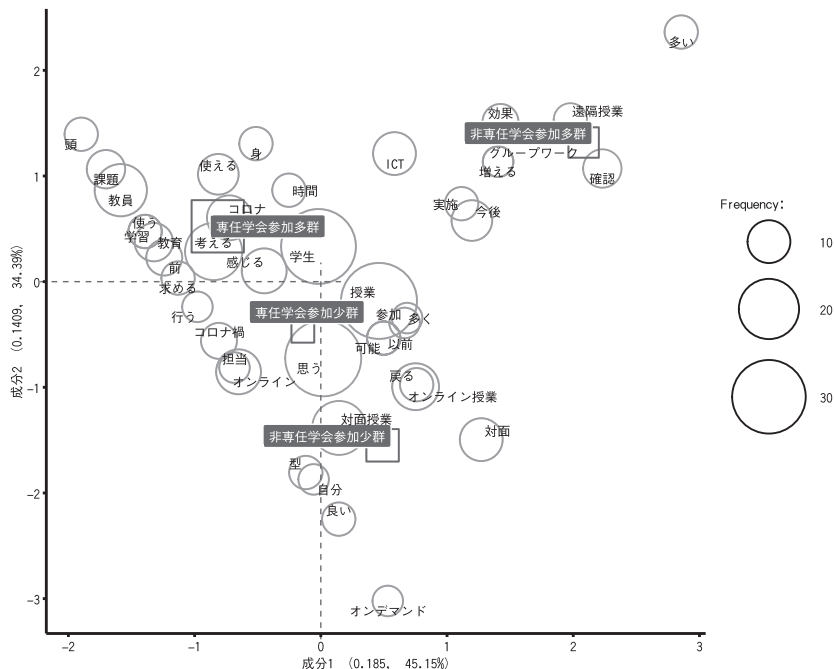


図10 専任・非専任と学会参加頻度に関するコレスポンデンス分析結果

表2 専任・非専任および学会参加頻度における特徴語

専任学会参加多群	専任学会参加少群	非専任学会参加多群	非専任学会参加少群				
考える	.185	ICT スキル	.167	知る	.136	思う	.234
学生	.183	多く	.133	多い	.130	対面授業	.194
教員	.177	良い	.133	遠隔授業	.125	対面	.161
コロナ	.109	時間	.125	確認	.120	授業	.152
課題	.098	対面授業	.120	今後	.111	オンライン授業	.147
教育	.097	コロナ	.095	ICT	.107	オンデマンド	.143
使える	.097	感じる	.095	タスク	.095	オンライン	.118
オンライン	.092	学生	.091	ニュース	.095	考える	.100
感じる	.092	オンライン授業	.091	海外旅行	.095	Moodle	.074
頭	.083	教員	.087	興味	.095	Zoom	.074

注：数値はJaccard 係数を示す。

統、学生同士のコミュニケーションが課題だと思いません。

【学会参加少群】

・オンライン授業よりは対面授業が望ましいと考えております。そして、学生の勉強意欲を高める効果が絶大であろうと思ひ、いろいろな便利ツールを使いこなせるよう模索はしておりますが、昔の板書で「手書き」もとても大事だと思います。

・二〇二〇年からコロナのために、全面的にオンライン授業を実施したが、調査結果から見ると理想的とは言えない。語学教育、特に基礎的な語学教育はオンラインには向いていないと思う。教員と学生の間の交流があまりできなかったこと、教員は多くの時間をかけてPPTを作成したが、良いフィードバックは得られなかったこと、学生は勉強する意欲がなかった等があげられる。可能であれば、できるだけ対面授業をすることによって、授業の目的を達成することができらるだろう。

続いて、教師歴の長さや学会・ワークショップ等への参加頻度によって記述内容が異なるかどうか注目し、分析を行った。教師歴については平均値(二八・〇九年)を参考として設定した。学会参加の群分けは先の分析と同様で

あった。結果を図11に示す。第1軸(成分1)は学会参加の頻度要因であり、第2軸(成分2)は教師歴要因であると解釈され、群ごとに特徴語が異なる可能性が示唆された。群ごとの特徴語を検出するために、外部変数と頻出語の共起の強さを表すJaccard係数を算出した。その結果を表3に示す。

図11および表3によれば、学会参加の多寡に関わらず教師歴の長い教員はコロナに関する特徴語が多かった。個々の具体例をみれば、教師歴の長い教員ほど、今回のコロナによって授業のやり方を見直す契機となった、コロナを機に獲得した授業方法をその後も積極的に活用するという記述が多く見られた。以下に代表的な具体例を示す。

【教歴の長い教員】

・ICTを授業に取り入れることが億劫でなくなった。
・教師にとつては、これまでの授業のやり方を見直す良い機会になったと思う。

・コロナで身につけたツールを効果的に利用していけば、従来よりも質の高い授業ができると思う。
・LMSがより一層充実して、学生にとつても教員にとつても使い勝手をもっとよくなれば、コロナ前の黒板を使用するような対面形式の一斉授業は不要であると思う。
また、本来、自律的な学習は、時間や空間の制限を受け

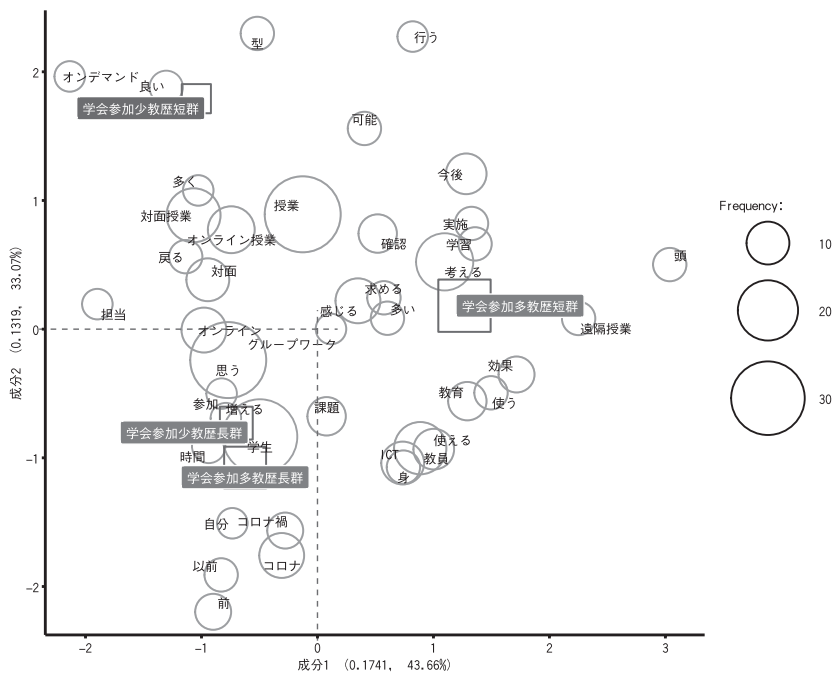


図11 学会参加頻度と教師歴頻度に関するコレスポンデンス分析結果

表3 学会参加頻度および教師歴頻度における特徴語

学会参加多教歴短群	学会参加多教歴長群	学会参加少教歴短群	学会参加少教歴長群				
考える	.175	学生	.222	対面授業	.250	思う	.143
教員	.125	思う	.192	授業	.212	自分	.115
今後	.113	授業	.140	オンデマンド	.188	対面授業	.108
頭	.100	コロナ	.135	思う	.184	以前	.107
遠隔授業	.098	専攻	.129	オンライン授業	.182	コロナ禍	.103
教育	.094	前	.118	対面	.150	コロナ	.091
ICT	.091	オンライン	.105	メリット	.143	オンライン授業	.088
感じる	.089	教員	.100	公平	.143	ICTスキル	.080
学習	.077	授業内容	.094	困難	.143	Moodle	.080
効果	.077	変わる	.094	試験	.143	不安	.080

注：数値はJaccard係数を示す。

るべきではないと考えているため、対面による一斉授業を無条件によしとする世間や学内勢力の動きには辟易しており、より俯瞰的で長期的視野に立った方向性の提示があればよいのかなと感じている。

・With/Post コロナの中国語教育は、もはやコロナ前のような教室中心の教え方、知識を一方的に伝えるだけの教授法に戻れない。ICTを利用して学習者に最適な学習方法をデザインして提供してあげるような教育になりつつある。

・コロナ以前とコロナ禍で、特に自分の授業準備や方法は大きく変わったわけではないが、反転授業に対して学生の抵抗がなくなっただけで、学生のICTスキルが少しついてきたおかげもあり、授業自体はやりやすくなった(自分の準備したものが学生たちの学修に役立つという実感もあり、かつ、さらに学びたい学生にとってオンライン環境のほうがより力を伸ばしやすいつ感じている)。一年半にわたり同時双方向型のオンライン授業が続いているが、対面授業に戻って、学生や他の教員たちの考え方やスキルがコロナ前に戻ることには不安を覚えている。せっかく身につけたICTスキルを活かした教育が求められる。

・コロナ禍によって始まった遠隔授業で、初めてMoodleの存在を知った。オンデマンドによる方式だったが、コ

ロナ禍以前には全く思いもしなかった方式だった。対面のリアルタイムではできない、見直し、聞き直しができる点で、対面以降でも役に立つ方法だと思った。動画作成は現時点では手間がかかるが、簡単にできるのであればMoodleの機能と共に今後も使っていきたいと思っている。

三 今後の中国語教育について

最後に今回のアンケートの実施・分析を通して、With/Post コロナの中国語教育について筆者が重要だと考える三点を以下に述べる。

(一) 教育コンテンツの共有化

マイナズ面の指摘もあるオンライン授業ではあるが、学生が教員の作成した動画を繰り返し視聴できるという環境が整ったことはプラス要素であるといえるだろう。筆者が作成した発音動画を例にすると、コロナ以前の対面授業であれば、五回前後の授業で発音段階は終了し、この期間にピンインや声調がマスターできなかつた学生は、それ以降の学習の積み上げがかなり難しかった。発音段階の授業で、学生に発音動画を予習・復習に活用するように指示したところ、動画を繰り返し視聴した学生が予想よりも多

く、オンライン授業であってもコロナ前より発音の基礎をマスターできた学生が増えたことを実感した。四百強ある中国語の音節を数回の授業だけでマスターするというのは初学者にとっては難しく、これまでは教員も、学生もできたつもりで授業を続けていたわけである。動画があったからこそ、学生は授業外で各自のペースで繰り返し視聴することができ、発音段階で落ちこぼれていく学生をかなり救えたのではないかと考える。発音動画だけでなく、使用しているテキストの区別なく文法項目を十分以内で解説する、東京外国語大学言語モジュール⁵⁾の動画版があれば、反転授業として予習で動画を視聴し、対面授業に臨み、授業後に不明点があれば再度動画を視聴することによって、それぞれの学生にあったペースで学ぶことが可能になるだろう。

新たな教育ツールとしての動画コンテンツの有用性がわかったので、With/Post コロナの中国語教育においても積極的に継続利用されていくべきだと思うが、教員が一人でコンテンツを作成するというのは時間的にも、体力的にも難しいものがある。遡ること、二〇一四年五月にコンテンツの共有化を目指して、「中国語学習ジャーナル Chinese Station」(制作・運営：水野善寛、紅粉芳恵⁶⁾)というサイトを立ち上げた。これは中国語学習をはじめ、中国語、中国に関する情報を発信することを目的とし、有志の教員に

記事の執筆を依頼し、学習素材の提供を受けることで成り立っているサイトである。コロナ禍で動画コンテンツを作成した教員もたくさんおられるだろうから、それらのコンテンツを私蔵するのではなく、是非、このサイトで共有してくださるようお願いしたい。

(二) 教員のつながりの強化

我々教員は個人商店のようなもので、同じ大学で、同じテキストを使って中国語を教えていても、隣の教室の教員がどのような教え方をしているのか知らないというのが一般的な状況であるだろう。それに加えて今回のコロナで「非常勤は以前よりも孤立している感じがする」とアンケートに記入している教員もいて、授業運営に対する悩みが深まっているようでもある。

筆者が中国語授業の運営に関わっている通信制高校のN高等学校・S高等学校は、教員コミュニティがうまく機能している例といえるだろう。教員は毎回の授業報告をSlackにアップすることがルーティンワークとなつている。教職員全員が閲覧することができ、各教員がどのような授業をしているのか、高校生が興味を持ちそうなサイトを、ちょっとしたゲームのアイデア、授業での悩みなどを共有できるシステムになつている。授業報告の内容についてスレッドで盛り上がることもあり、さらに詳しい情報を

得たければ、教員間のダイレクトメッセージでやりとりすることもできるようになっている。授業手法は一つでも多く持っているほうがよいので、筆者も授業報告をチェックして、紹介されていた動画コンテンツやアイデアを大学の授業でも使用させていただいている。

また、今回、メンバーにアンケートをお願いした中国語教授法研究会は、二〇一四年八月に大学、高校、民間で中国語を教えている人たちの交流の場として設立し、発音指導法や文法指導法などテーマを決めて例会を開催してきた。この二年間は幹事が本務校の業務が多忙であったため、思うように例会が開催できなかったが、二〇二二年度二回目の九月の例会では、中国語教員を目指す学生に模擬授業をやってもらい、ベテラン教員が指導するという活動を行った。

このように教員同士がつながることによって、中国語の教え方の集合知を構築できればと考える。

(三) 教員のマインドセットを変える

日本のこの二十数年間の低迷は、教育にもその原因があるのではないかといわれている。中央教育審議会は、令和三年一月二六日の第一二七回総会で「令和の日本型学校教育」の構築を目指して、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）

を取りまとめた。この「個別最適な学び」とは「個に応じた指導」（指導の個別化と学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念とされている。これまでの一斉授業型から脱却し、個々の児童・生徒の学びの質を重視する方向に進んでいるわけである。

それに呼応するように、学校以外の教育現場においても、atama+（アタマプラス）というBtoBtoCモデルの教育ベンチャー企業が、「AI×人間の先生」をコンセプトとしてAIを用いた学習システムを全国三千以上の塾に販売し、最先端のテクノロジーを使って、「自分専用カリキュラム」を提供している。リクルートマーケティングパートナーズが運営しているインターネット予備校のスタディサプリも、日本の五千校ある高等学校の半数以上で導入されているという。

また令和元年から開始されたGIGAスクール構想（全国の児童・生徒に一人一台のコンピュータと高速ネットワークを整備する文部科学省の取り組み）により、ICTスキルを備えた子供たちがどんどん育ってきている。

さらに、小・中学校では「総合的な学習の時間」、高等学校では「総合的な探究の時間」といった科目で、自らが課題を設定し、解決に向けての情報を収集・整理・分析し、周囲の人と意見交換や協働しながら、正解のない問題に取り組むという学習活動も行われている。まさに教育の

地殻変動が進行中なのであるが、このような新しい教育を受けた学生が大学に入学してくるなかで、我々教員は果たしてこの変化に対応して教育を行っていく心構えができていくのだろうか。

筆者も教師歴が二〇年近くになり、中国語教員として中国語力アップのための勉強は続けているが、ここ数年は自分の教え方はこれで良いのだろうかということに不安と疑問を持ち、教授法に関する書籍を色々読み、教え方を学ぶオンライン講座に参加するようになった。そのなかで、向後千春の著書に、「教えられる人が学んでいなければ、教える人は「教えた」とは言えないという「学習者検証の原則」をひとたび受け入れると、まったく新しい世界が開けます。それは、教えられてもいい結果を出せないのは、教えられる側の責任ではなく教える人の責任である、という新しい見方です。教えられる人のやる気がないなら、やる気を起こさせるところから教える人の責任範疇になります。つまり、結果が思わしくないのは、教える人の技術不足のせい。教える人の責任は重大です！」と書かれています。「何で分からないのだろうか?」「たった数分前に説明したばかりなのに……」とできないことを学生のせいにしていたが、原因は全て教える側の自分自身にあるのだということが心に深く突き刺さった。教員にとつてこの「学習者検証の原則」という考え方を受け入れるのはそう容易いも

のではない。なぜならこれまでの自分の教え方を真っ向から否定されているのと同じだからである。しかし、変化の激しい時代にあつて、ここで我々教員がマインドセットを変えておかなければ、多様性を持つ学生の教育を行っていくことはできないのではないかと思う。

一八歳人口は、令和三年から減少局面に入り、令和二二年には約八八万人まで減少することが予測されており、大学間の学生獲得競争はさらに熾烈なものとなる。現時点ではどの大学でも第二外国語として中国語を履修する学生が一番多いだろうが、今後の日中関係の展開によっては何らかの要因がトリガーとなつて履修者の減少もあり得るだろう。また一部には身につかない大学の第二外国語不要論が存在することも事実である。教育のDX化、Web3.0、AI、メタバースなどの技術進化により、今後十数年で世界は劇的に変化するだろうと予想される。With/Postコロナで教員をしていく我々の仕事とは、一方的に教えるのではなく、学生が「活学活用」できて始めて完了し、人を育てるといふ重責を担っているのだということを再認識する必要があるのではないだろうか。

注

(1) 中国語教授法研究会 (Society for Teaching Method of

Chinese) <http://www.ch-station.org/stm/>

教師一人ひとりが持っている教え方の経験知を公開し、より良い教授法を模索、共有することを目的として、二〇一四年八月に設立。定期的開催される研究例会は参加者主導型で、指導経験の少ない若手の学びの場も兼ね、中国語教師全体の教える技術の向上を目指す。代表幹事：阿部慎太郎、幹事：水野善寛、紅粉芳恵、中西千香

〈2〉 高等教育機関におけるICTの利活用に関する調査研究報告書(第二版)

令和二年七月 大学ICT推進協議会 (AXIES) ICT利活用調査部会 https://axies.jp/_media/2020/07/2019_axies_ict_survey_v2.pdf

〈3〉 授業に役立つアプリ

・ 中国語お名前チェッカー <http://www.ch-station.org/dntext/onamae/> 日本語で氏名を入力することで、簡体字と拼音を知ることができる。

・ 中国語拼音変換ツール <http://www7384uc.sakura.ne.jp/dhmcab/> 中国語を単語に分割し、声調符号付きの拼音に変換できる(一〇〇〇文字以内)。

・ クラス名簿一発作成ツール <https://www1.lang.osaka-u.ac.jp/user/suzukish/chinese/manMeibo.htm> 日本語で氏名を入力することで、簡体字と拼音に変換できる。

・ Quizlet <https://quizlet.com/ja> 利用者が単語などの暗記内容を作成できるオンライン学習ツール。複数の学習モードを選択することができる。自分で作成する以外に

五億件以上の学習セットを自由に使用することもできる。

・ Padlet <https://padlet.com/> Webブラウザで使用できるオンライン掲示板アプリ。テキスト、画像、音声、動画、書き込みなどが投稿でき、利用者は閲覧、コメント記入ができる。グループワークやアイデア出しに便利。

・ OndokuChinese <https://www.ondoku.org/> 自分で作成した教材、他の人が作成した教材で中国語の発音練習ができるアプリ。

・ Khozi: <https://kahoort.com/> 多肢選択問題を用いた教育用ゲームアプリ。

・ GoogleJamboard <https://jamboard.google.com/> Googleが無料で提供しているWebブラウザ内で動くデジタルホワイトボード。

・ Google フォーム <https://www.google.com/forms/about/> Googleが無料で提供しているWebブラウザ内で動くアンケート作成ソフト。

・ Google スライド <https://www.google.com/slides/about/> Googleが無料で提供しているWebブラウザ内で動くプレゼンテーションソフト。

・ Google スプレッドシート <https://www.google.com/sheets/about/> Googleが無料で提供しているWebブラウザ内で動く表計算ソフト。

・ Google ドキュメント <https://www.google.com/docs/about/> Googleが無料で提供しているWebブラウザ内で動くワープロソフト。

- ・ Explain Everything <https://explaineverything.com/> iPadで簡単に動画教材を作成できるアプリ。
- ・ Canva <https://www.canva.com/> 無料で使えるオンラインのグラフィックデザインツール。SNSの投稿、Webサイト、プレゼンテーション、ポスター、ロゴなどのテンプレートが豊富にある。
- ・ BookWidget <https://www.bookwidgets.com/> 様々なパターンのオンラインテストを作成できるアプリ。
- 〈4〉 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析と継承と発展を指して 第二版』ナカニシヤ出版、二〇二〇年。
- 〈5〉 東京外国語大学言語モジュール <http://www.coelang.tufs.ac.jp/nt/zh/>
- 〈6〉 中国語学習シヤール Chinese Station <http://www.chinestation.org/>
- 〈7〉 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）
【概要】 https://www.next.go.jp/content/20210126-nxt_syoto02-000012321_1-4.pdf
- 〈8〉 atama+ <https://www.atama-plus/>
- 〈9〉 スタディサプリ <https://studysapuri.jp/>
- 〈10〉 向後千春『世界一わかりやすい教える技術』技術評論社、二〇二〇年、三九頁。